

保育の中の小さなこと大切なこと ⑨

— 落とした紙くず —

守 永 英 子



十月末近く、戸外での遊びに忙しかった子どもたちも、誕生会の前日になると、思い出したように、「お誕生会のお菓子入れを作る」と言い出した。一日で作れるものを考えて、紙皿に模様を書くことを提案すると、興味を持った子どもたちから活動が始まり、その輪が次第にひろがっていった。中には、リボンをつけて提げるようになり、安定が悪いのに気付いて、リボン二本にふやすなど、子どもなりの工夫もみられた。

誕生会の当日、皆でお菓子をいただいたあと、私はいつもより忙しかった。というのは、いつもは、食べる時にはプラスチックのお皿に、帰る時は自分で作った入れ物に入れて持って帰った。つまり自分で作った入れ物は、持って帰る時の入れものであった。しかし今回の紙皿は、食べる時には都合がよかったが、持って帰る入れものとしては、不都合だった

のである。

子どもたちは、友だちのお皿につけてあるリボンに気づいたり、自分がお菓子をに入れてみて、その具合の悪さに気づいたりして、リボンをつけたい、リボンを二本にしてほしい、お皿の縁を立ててお菓子がころがり落ちないようにしてほしいなどと、次々に言いに来た。子どもたちの要求に応じているうちに帰る時刻がせまり、子どもたちに帰り仕度を促しながら、私も帰りの態勢をととのえるために、机を部屋のすみに寄せようとした。すと思うがけないことに、一つの机の下が紙くずだらけなのである。そういえば、この机には、くず入れのざるが出ていなかった。お菓子を食べ始めた時、S など二、三の子どもが紙くず入れのざるをとりきたので、私も安心してそれ以上注意を払わなかったのが、この机の子どもたちには、それが通用しなかったのである。

私は、いささか失望しながら、「紙くずを落としたりした方は、自分で拾ってね」と言ったが、誰も拾おうとはしなかった。

「この机でお菓子をいただいた方は拾って頂だい。この机で食べたのは誰だったかしら？」半数位の子どもたちが、もう仕度をし終って席についていたが、私の問いかけはむなしかった。子どもたちは黙りこみ、無言のうちに「私じゃない」という警戒の表情が読みとれた。この机にいた子ども達の顔を見出し浮かべようとしたが、忙しさに追われていたので、思いつからぬまま、私はあきらめて、「落とさないで自分で捨てるのよ」などと、あまり意味のないことを言いながら、急いで大きい紙くずだけ拾った。

「さよなら」のあいさつをしようと子どもたちの前に立つた時、拾い残した紙くずが、まだいくつか目についていた。私は、子どもたちに働きかける方向を変えてみた。「自分の前に落ちてゐる紙くずを拾って、捨てて頂だいね」二、三人の子どもが、それに応じてくれた。私の、先程の孤立感が薄らいだ。「どうもありがとう」それは私の自然な気持ちから出た言葉だった。「Y子ちゃん、あなたのいすの下のごみも拾

ってね」というと、Y子はげんそうに私を見上げた。「わたしは落としたんじゃないよ」「そう、あなたじゃないけど、あなたの下に落ちてゐるから」「うん」Y子も納得して拾ってくれた。私の気持ちはなごんだ。

私と子どもとの関係は、先刻の「とがめる者」と「とがめられる者」の関係から、「頼む者」と「頼まれる者」、そして「らって感謝する者」と「してあげて感謝される者」の関係に変わった。「とがめられる者」の立場に立たされた時、子ども達の心は、自分を守ろうとする固さで閉じられ、私は孤立したが、働きかける方向を変えたことで、子ども達の心は開き、私の気持ちはなごんだ。

落としたその場で「○○ちゃん、紙くず落ちたわ。拾ってね」ということは受け入れやすい。しかしこの日のように時期を逸した状況では、思いがけなく、むずかしいことであった。「自分の落とした紙くずは自分で始末する」ということに對しては回り道であったが、「落ちてゐる紙くずを気にして拾う」というから、「自分が落とさないように気をつける」という方向へ向かう道があつてもよいような気がしたのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)